様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 23 年　5 月　1 日現在

機関番号：32635
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：20500722
研究課題名（和文）母親の育児行動・体型への関心が幼児の健全な食行動の発達に与える影響について
研究課題名（英文）A study into the affects of mothers' nursing behavior and interests in preschool children's body shape in the development of healthy eating behavior

研究代表者　長谷川　智子（HASEGAWA　TOMOKO）
大正大学・人間学部・教授
研究者番号：40277786

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：生活科学・食生活学
キーワード：
育児行動・体型への関心・幼児・母親

１．研究計画の概要

本研究では，近年新たに大きな問題とされている養育者である母親自身のダイエット志向，子どもの体型への関心の程度をとりあげ，さらに母親の育児行動が子どもの健全な食行動の発達にとって適度な「ゆらぎ」をもつものかどうか検討していくこととする．

本研究では，次の 4 点を目的としている．

(1) 母親の育児行動，体型への関心が幼児の食行動に与える影響についての定量的・定性的検討
(2) 母親の育児行動に対する意識と実際の食事に関する検討
(3) 母親の育児行動，体型への関心,食意識・幼児の食行動,実際の食事のいずれかに問題がある場合の対応
(4) 乳幼児の栄養指導，保健指導への適応の検討

これら 4 点について検討するために，インターネット調査をおこなう．対象者は，25-44 歳 3～5 歳児子どもをもち，核家族で，25～44 歳の母親である．インターネット調査は，1，2 次調査から構成される．1 次調査では，母親の育児行動，体型への関心，子どもの食行動等に関する調査であり，量的，質的評価により実施する．2 次調査は，1 次調査の調査対象者の中から食事調査を希望する者を抽出し，実施する．食事調査は，任意の 1 週間のうちで，非連続の 3 日間（うち休日 1 日）に飲食したものすべてを携帯電話の写真機能に撮影し WEB 上にアップするものである．希望者に対して，食事の分析結果をフィードバックし，改善策を提案する．

２．研究の進捗状況

平成 20～22 年度の 3 年間で，インターネット調査の 1 次調査，2 次調査ともに終了した．調査対象者の人数は，1 次調査 1,000 名，2 次調査 68 名であった．それぞれの調査の分析については，現在実施中である．現時点で分析された結果の概要は次の通りである．

(1) 1 次調査において，子どもの食行動に関する項目について因子分析をした結果，「食物選択の偏り」，「注意集中の低さ」，「自由な間食摂取」の 3 因子となった．それら 3 因子を目的変数，母親の育児感情，子どもの食行動等への母親の期待，子どもの食行動に関する項目を説明変数として重回帰分析を行った．その結果，子どもの食行動に関する 3 つの問題すべてに影響を与えた変数は，子どもの落ち着きのなさ，母親がしつけを重視しないこと，子どもが泣いたらお菓子を与えるということであった．一方，自由な間食摂取に関する問題には，食物選択の偏りと注意集中の低さと異なり，母親は子どもが痩せていることを期待していることが示されるなど，自由な間食摂取は他の 2 つの問題と異なった変数が影響していることが示唆された．
(2) 2 次調査において，調査対象者の 3 日間の食事を食事バランスガイドによって，主食，副菜，主菜，牛乳・乳製品，果物，ひもに分類し，1 日あたりのそれぞれのサービング数(SV)を算出した．その結果，健康維持の目安となる SV に達しなかった分類は，主食，副菜，牛乳・乳製品・果物であり，幼児をもつ母親の食事バランスは健康を維持するに十分でないことが示された．また，調査対象者を 25～34 歳，35～44 歳の 2 群に分け，食事バランスの平均値を比較したところ，25～34 歳

の方が牛乳・乳製品の摂取が少ないことが示された．また，食事の分析結果を希望者に対して，フィードバックを実施し，解決策を提案した．

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している．

当初の目標であった 1 次調査，2 次調査を平成 22 年度までに予定通りに終了し，基本的な分析を終えているという点において，経過は順調であるといえる．ただ，1 次調査の実施が当初の予定より遅れたために，準備段階での発表や，論文発表は行い，現段階で投稿中の論文はあるものの，本調査に関する研究を発表することが最終年度に持ち越されていることが課題である．

４．今後の研究の推進方策

最終年度は，1 次調査，2 次調査のさらなる分析による因果モデルの構築と，質的質問の分析，それらを踏まえての乳幼児の栄養指導，保健指導への適応の検討である．

早い時期に調査に関する分析を終え，論文の投稿をしつつ，栄養指導，保健指導への適応を検討していく予定である．

５．代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者は下線）

［雑誌論文］（計 3 件）

① 長谷川智子，食行動の発達心理学的展望(3)長谷川智子，今田純雄，川端一光，坂井信之，大学生の食態度・食行動についての基礎的研究－食の優先順位，経済的要因の観点から-，大正大学大学院研究論集，34,1-21,2010，査読無

② 長谷川智子，食行動の発達心理学的展望(2)Birch らの親子の食行動に関する縦断的研究大正大学大学院研究論集，33, 1-22,2009，査読無

③ 長谷川智子，食行動の発達心理学的展望(1)Birch らの乳幼児期の食物嗜好と食物摂取調節に関する研究，大正大学大学院研究論集，32, 1-21,2008，査読無

［学会発表］（計 9 件）

① 長谷川智子，今田純雄，武見ゆかり，田崎慎治，日常の食行動に関する健康心理学的・食生態学的検討(3)大学生と中学生の日常的な食物摂取と共食について，第 23 回日本健康心理学会，2010 年 9 月 12 日，江戸川大学

② 長谷川智子，川端一光，今田純雄，母親の育児ストレスに影響を与える食行動の要因についての因果的検討，第 21 回日本発達心理学会，2010 年 3 月 26 日，神戸国際会議場

③ 今田純雄，長谷川智子，武見ゆかり，田崎慎治，日常の食行動に関する健康心理学的・食生態学的検討(2)携帯電話の通信機能を活用した食行動測定の試み，第 22 回日本健康心理学会，2009 年 9 月 8 日，早稲田大学

④ 長谷川智子，今田純雄，川端一光，田崎慎治，授乳スタイルに影響を与える要因についての探索的研究，第 73 回日本心理学会，2009 年 8 月 27 日，立命館大学

⑤ Sumio Imada, Tomoko Hasegawa, Hisashi Masuda, Atsuo Takagaki, Takashi Sakamoto, Hiroki Koyama, Charles Prible, Attitudes to food and the role of food in life in Japanese women, XXIX International Congress of Psychology, 2008 年 7 月 21 日,Berlin

［図書］（計 2 件）

① 長谷川智子，有斐閣，健康心理学・入門，2009，　89-105

② 長谷川智子，医歯薬出版，心・栄養・食べ方を育む乳幼児の食行動と食支援，2008，24-31

以上